

たより第61号目次

江戸の秋・旅日記

西松 布咏
アヴァンギャルドの神々の宴

ヤリタミサコ
時代・国境を越えた魂の交信

中田 茂
はるか天空に飛翔する人

橋本 直樹
《岐阜たより》

福村 善光
布詠師匠岐阜で面目躍如

今後の公演他予定

一月廿八日(水) 六時より

グランドアーク半蔵門
NPO法人 篤くひびき

邦楽三味・西松布咏の唄と三味線で
正月を寿ぐ

二月八日(日) 三時より
岐阜・かわらや

第二回 粋艶会 唄い初め
演奏会および親睦の夕べ

三月廿八日(土) 十二時より
赤坂・泉クラブ

第三十七回 美紗の会のついで
美紗の会一門演奏会と親睦の夕べ

江戸の秋・旅日記

西松 布咏

十月十八日の「第五回ニュアンスの会」は朝から金色の光が白金の森に降りそそぎ、伝統から前衛へとホルルのカーテンを揺らす饗宴の夕暮れ時まで優しさに満ちていた。やがてDVDの発売と十周年を記念した会が終わるとあたりは静謐な間に包まれ、満月の少し欠けた一筋の光が、帰り道を歩く私の背中に射す。ようやく終わったという安堵感と新たな旅が始まるという明日への祈りが交差したような秋の月だった。

感慨に浸るまもなくその一週間後にあわただしく徳島へ旅立った。徳島市かちどき橋にひっそりと佇む阿波蜂須賀藩の武家屋敷・原田邸で演奏する為。

仕掛け人はニュアンスの会の司会をして下さった田口教授である。同志社大学の情報学科ゼミの生徒に「江戸時代の室内楽である三味線音楽を当時の歴史を紐解きながら体感させたい」との思いで保存会のご好意と先生方の熱意で実現した。

平成十四年十一月十六日に地元の友人が中心となって和ろうそくと和紙に包まれた深い陰影の演出による「江戸の魅力」演奏会をこの屋敷で行ったことがきっかけだった。

庭のそばまでマンションが隣接し、出入りする車両の音がまじかに聞こえる六年ぶりの演奏は当時の面影はまだ残っているものの、江戸の音は遠くなりけり……のようではあ

たが、学生達は瞳を凝らし三味線と私の話に熱心に耳を傾けてくれた。

徳島へ導いてくれた「よしこの節」で知られる名物芸者お鯉さんも、昨年天空へ旅立たれてしまったが又こうして若者に聞き継がれてゆく縁をありがたく思った。

翌二十六日予讃線に揺られ、高松空港から夕方のみの運行便で鹿児島へと向かったが、一便しかない飛行機の整備に手間取り、空港で二時間も足止め。一人の巡業はこんな時には心細いが、気を取り直しロビーの寿司屋に入り新鮮なネタが揃った握り寿司で旅気分を味わい、とっぴり暮れた夜の八時過ぎにようやく鹿児島空港にたどり着く。長らくお待ちさせたお迎えの車で真っ暗闇を猛スピードで二時間走り最南端の枕崎へ。運転して下さった森文化係長のお宅は潮の香が漂い、前日素もぐりで獲って下さったという伊勢海老がお皿にうす高く盛りられ、私の到着を待っていてくれた。かくして深夜に鹿児島弁の飛び交う焼酎で歓待の宴と相成った。

翌朝打ち寄せる波の音に目覚め、鄙びた旅館の窓を開けると眼の前に大海原が広がっていた！

ここがはるか天平時代に唐僧鑑真が漂着した秋月浦なのだ……と昨夜の長旅の疲れもどこえやら感嘆の声を上げた。朝食後まだ夏の名残りの強い日差しの中を今宵の会場「南冥館」へ下見に行く。海を見下ろす小高い丘に建つ館は、水産業を中心にしてきた市民の新しい文化ゾーンとして活動しており、船の碇をイメージした木造の斬新なホールが会場として用意されていた。

宿へ戻る道すがら、芋焼酎の蔵元「明治蔵」に立ち寄ったものの、公演前ゆえお芋の醗酵する香りだけで我慢する。とほほ。我は旅芸人なのだ……。

それよりも稽古をせねばと陽光が燦爛と差し込む日に焼けた畳の部屋で、波の音をまじ

かに聞きながら三味線とともに「ゆき」を唄う。こうして自然の中に身をゆだね、穏やかに内なる自分と対話するひと時はまさに天からの贈り物と思つ。やがて太陽が海を染めようとしている刻の速さにふと現実に戻り身支度をせねばと我に返る。海が覗き見をしている鏡台の前でながーい帯との格闘。ああ箱屋のいない芸者の辛さ！ようやく何とかお座敷に向かう着物姿になりお迎えの車に飛び乗る。すっかり暗くなった今夜は闇夜。こんな宵はイカ釣りにしてもいいのだが。

すでにお客様はお集まりで、舞台の緋毛氈の背景には演奏会の立役者である坊津出身の松山孝画伯の墨絵「哀歌」が静かに広がっている。やがて夜空を見上げるように高い天井に抑えたあかりがぼつと浮かび、吉原のお座敷に屋形船で着いた客を迎える賑やかな小唄「並木駒形」が始まる。洒落た文句のさまざまな江戸の秋を、端唄、新内、歌沢とお喋りを交えながら唄ってゆく。そして最後にあかりを消し、漆黒の闇夜に降る地唄「ゆき」で幕を閉じた。

海底のようなホールに私の声は良く響き、お客様からお握手と感激の言葉をたくさんいただいた。打ち上げは地元の歌手・實吉さん行きつけの居酒屋にお仲間が集まって



さり、ギターと共に潮風で鍛えた声の心に
沁む忘れられない夜となった。

海の男達の熱いぬくもりを胸に残し、鹿
児島最南端・枕崎の旅を終え、十一月一日
最後の公演の地、群馬へと上越新幹線に向
かった。

安政六年横浜開港により製糸工業が盛ん
になり明治には「糸の町」として知られる
ようになった前橋。駅に降りると創作きも
ので知られる「にしお・卯菴キヤラリー」
の「亭主西尾さんが笑顔で迎えてくださる。
徳島での公演がきっかけとなり四年越しの
ようやくの思いが「夕ざりに聞へ江戸の唄」
として今日に至った。

秋の柔らかな日差しが木の香りと相まっ
てそこはかない和のしつらいとなり、檜
の舞台には白菊と秋の草花の屏風が。そし
て客席となる座敷には到来を待つ小座布団
が八十枚程きちんと並んでいた。やがてあ
たりが静寂に包まれると、行燈がともり、
夕ざりと共に音連れる三味のひと撥。言葉
を必要としない無色のしじまが心地よい緊
張となつて座敷を彩つてゆく。デザインの

仕事をな
さつてい
た西尾さ
んの見事
な演出が
りに私の
声も着物
もいつし
か秋色に
染まって
ゆく。着物
を愛好さ
れている
方々と江
戸を結ぶ
「縁の糸」



が静かに紡ぎ出されたひとときであった。
演奏前の食事をご辞退したら、終演後に
竹久夢二の掛け軸のかかる趣きのある和室
で懐石料理をご用意下さり、心地よいお喋
りと酔いのなかで更け行く日本の秋を堪能
させていただいた。

翌朝はひんやりとした朝もやの中、く水
と緑と詩のまちを流れる広瀬川沿いを歩
き、萩原朔太郎を初めとする所縁の文学者
が展示されている「前橋文学館」あたりを
散策した。

誰もいない展示室の階段を昇るとここか
ら絃の音が聞こえてくる。

マンドリンをこよなく愛した朔太郎が作
った単調なメロディーの繰返し、大正か
ら昭和へと私をなつかしいセピア色に誘っ
てくれる。

存在の蜻蛉とはふと訪れる一瞬の心のや
すらさなのだろう。

私もいつの日かそのような蜻蛉になりた
いと思う。

そろそろニュアンスの会から始まった旅
日記を閉じ、心地よい安堵感と思い出をア
ルバムに残し新たな明日へのページをめ
くることにしよう。

アヴァンギャルドの神々の宴

ヤリタミサコ

秋の夜空が折りたたまれた、第五回ニ
ュアンスの会フライヤー（四釜裕子さんデザ
イン）を手にとると、半月が薄闇の空低い
位置に浮かび、おいでおいでと見るものを
呼ぶ。夜空に見え隠れする文字たちが、そ
の遠近のハザマに何かあるぞ、と指し示す。
二次元と三次元の、時間と空間との、視覚

と聴覚と
の、静止
と躍動の、
過ぎ去る
ものと現
在と未来
との、そ
れら往還
するもの
を暗示し
ている。

西松布
詠さんの
唄と三味
線の、秋
の宵の風

を吹かせる。江戸時代の恋人たちも二十一
世紀の今も、人目をしのび、来ぬ人を待ち、
臆月や波を眺め、霧にざわめき、雨にため
息をつくのだ。蝋燭の灯りがゆらめいて、
庭園美術館という空間の区切りを忘れさせ
るような演出。時間軸が折りたたまれ、江
戸時代の風景に迷い込んでいくような錯覚。
「櫓のお七」ではジョン・ソルトさん制作
の映像が投影されて、一瞬の恋に生きたお
七の唄と、石に刻まれた悠々たる時間の流
れが対比されている。「アユタヤの蜻蛉」は
中村仁さんのシタールのエキゾチックな
響きが、小野原教子さんの詩に物憂げな効
果を与えている。「ゆき」では、閑崎ひで女
さんの舞が西松さんの頭上に天女の羽衣の
舞のように投影される。モノクロの映像が
幻想的で、見えないはずの雪景色が自然に
見えてくるのは、舞と唄の表現の力ゆえ。

表現者がそこにリアルに心理と風景を具現
化しているからだ。西松さんの唄と天女の
舞は、現実か幻想か、その両方か。

第二部は、同会の田口哲也さんが紹介す
る言葉に困るほどすばらしいゲスト登場。



まずはジョン・ソルトさんが「シユレディ
ング・ザ・タパストリー・オブ・ミーン
グ」という北園克衛についての著書の日本
版を白石がすこやかに捧げると一言。そし
て北園克衛の詩「黒い肖像」を、英語がソ
ルトさん、日本語が白石さん、唄を西松さ
ん、タブラを中村さん、そのつえに大野慶
人さんが頭部を黒い布で覆つての舞踏。細
江英公さんのスライドも投影。舞台は、さ
ながらアヴァンギャルドの神々が集う、オ
リンポスのよつである。「胡蝶の夢」では、
細江さんのスライド投影と慶人さんが重
なつて、大野一雄と蕭白を重ねて写した細
江作品「曾我蕭白に入我没入する大野一
雄」をライブで見せられていたようなドキ
ドキ感だ。細江さんの名作写真「おとこ
と女」シリーズの画像も投影されている。
なんと贅沢な空間なのだろうか。慶人さん
が手にしている人形が不思議な存在感。白
石さんの声とイスラージに陶醉していく。
白石さんからは「大野一雄さん百二歳おめ
でとう」の言葉も贈られた。そして慶人さ
んとそこにはいないはずの大野一雄さんは、
二人で見えたり見えなかつたりする精霊の
ように舞踏している。

白石さんの「炎える瞑想」は私の大好き
な詩集だ。その中から「存在」を白石さん
とソルトさんによる朗読。ワイルドな生命
力が伝わってくる。白石さんの声はエロテ
ィックでチャーミングで、聞き手の耳をざ
わめかせる。西松さんはこの詩に即興的に
曲をつけたとこのこと、アカペラでの唄。
叙情性が強く引き出されているような印象。
三味線がないアカペラも、唄そのものを楽
しめて良いものだと思つたら、ラストには現実

「影法師」では、西松さんと慶人さんの
共演。存在自体が浮遊している白いドレス
の慶人さんが夢のそのまた向こうの世界を
連れてきた、と思つたら、ラストには現実

に連れ戻されるような演出だった。そして最後に北園克衛の「フルー」。白石さんとソルトさんによる詩朗読、西松さんの唄と慶人さんの青い舞踏。この唄では「ジャコメツティのロー」という西松さんの伸びのある声の長音がすばらしい。おそろく唄い手にとっては、一曲に十三回も「ロー」という同じ語尾があるのは唄いやすいはずはないのだが、西松さんの声は、モダンでクールな表情をとりつつ冷たい熱情を表出する。三味線のチヨウキングの繊細な表現もあり、見事にモダンリズム詩が三味線と唄に融合している。

アヴァンギャルドであるとは、時代が追いついてきたときには新しいスタンダードと名づけかえられるものである。が、白石かすこさんの詩、細江英公さんの写真、大野慶人さんの舞踏、西松布詠さんの唄と三味線は、時代に追いつかれないほどの猛烈な速度で美を走るから、永遠にアヴァンギャルドなのだ。

白金の森の月も、間近で見る前衛の神々の宴に魅了されたに違いない。

時代・国境を越えた魂の交信

中田 茂

益々成熟し、彩りがました布詠さんの唄と三味線に聴き惚れた秋も盛りの日でし

た。「第五回「ニューアンスの会」、会場は庭園美術館。この会場は昭和初期に建てられた旧朝香邸で、現在、東京都が管理している。そのためか非常に官僚的で、しかも今回会場の大ホールは、二回目の東京オリンピック誘致を目指す某知事が、そのための施設

用にて建て替えを企て、来春の解体が既に決定しているそうである。次々に壊される都心の旧〇〇邸は中途半端な高層ビルに移り変わり、過ぎ去り行く日本人の心を何処かに消滅させていっているような気がするのは年寄りの何とかかなのでしようか。

本題に戻すと、今回のゲストの顔ぶれは何と云っても壮観でした。司会の田口教授が言っていたように、およそ今日の、それぞれ異なる分野で前衛を長年追求し続け、且つ円熟したアーティストを一堂に会したコンサートとして稀有な機会でした。そのため、ゲストたちが各ステージで成せるパワフルな表現の力と緻密さが、限られた設備条件も相まって、十分に観客に伝えられなかったことが惜しまれます。

また、布詠さんと共にニューアンスの会を創立した陰の功労者であるジョン・ソルト氏の英語による朗唱、映像による表現は、新たな和の伝統文化へのグローバルな解釈を提示し、頑ななまでの氏の思い入れがセッションへの緊張感を生み、結果的に今回のニューアンスの会のパワーと彩りを生み出したのは庄巻でした。

次に、客席が後方で観づらかった人たちのために、アーティストたちの表現を幾つか補足しておきます。

白石かすこさんによる大野一雄に捧げる讃歌朗唱。

大野一雄氏と白石かすこさんの長年にわたる交流を詩に綴り、巻物にしたためての朗唱でした。巻物であることが重要で、巻物であれば時間が連続してつながっていく。即ち、白石さんと大野一雄氏は、今も鮮明に連続した時間の中で交流を続けているというこ

なものです。大野慶人氏の「胡蝶の夢」でのパペット

使用。この人形はご存知、彼の美父でもあり、

日本を代表する前衛ダンサー大野一雄氏の人形です。その微妙な手や顔、体の軸の動きは、慶人氏が長年大野一雄氏のステージを演出し、自らもダンサー、表現者として追及してきた舞踏を映し出したもので、その像を目前にするとその細密で計算された動きに感動せずにはいられません。驚きでした。

「胡蝶の夢」は、更に写真家細江英公氏による若冲、蕭白の映像が慶人氏の動きに被さっていきます。

十八世紀末から十九世紀にかけて若冲、蕭白が描いた画の世界に入り込み競演する慶人氏、これはまさに時代を超えた表現者たちの競演なのです。このステージは、細江氏のたぐらみの下に、大野一雄を軸に、若冲、蕭白の絵画の世界に慶人氏が入魂し、そして白石かすこが交信しあい創りあげたアートの世界なのです。

時間を超えて交信させたのが細江氏なら、国境を越えて世界をつなげたのはジョン・ソルト氏です。芸

術が、人間の感性表現の美しさ、営みを、そして、それが自然の営みと一体化すると云った概念の

元に、中村仁氏のシタールが、イスラーシが、

タブラが、白石さんの、ソルト氏の詩が、大野慶人氏が、細江氏が、そして、布詠さんの唄と三味線が、どこまでも響いていく一条の波動となって交信しあい、秋のひと夜的美を醸し出したのです。

はるか天空に飛翔する人

橋本 直樹

第五回「ニューアンスの会」で、私は、そこで演出される不思議な時間内に浸りながら、二十数年前の布詠さんから、今、世界的な芸術家を組み合わせたパフォーマンズの真ん中に居る彼女への成長と飛躍の軌跡を回想していました。

「美紗の会の想い出」として「たより24号(平成九年五月)」にも書いたことですが、一九八三年五月十四日、南平台会館で開催された「第一回ゆかたざらい」が芸一筋に生きていくという決意と自信の表明であり、美紗の会を形作っていく旗揚げであったのだと思います。

豊かな才能、強い意志、向上心、好奇心に富み、人一倍スケールの大きい彼女は、そのときすでに、今日のように大きな翼をひろげて羽ばたく自分をひそかに予感しておられたのだと、今にして私は思います。天の配剤といつべきでしょうか、西松流地唄の家元西松文一師に弟子入りされたのは丁度その年です。

以後文一師は芸と唄の心を胡美紗さんに伝授され、六年後あの世へ旅立たれました。その霊前君子夫人から「あなたにあげるものは何も無いけど西松の名を継いで下さい。故人の意思ですから」と告げられた彼女は「わたしのような未熟者にこん



な大きな名前を…」と泣き崩れた、と当時の新聞は書いています。涙を拭いて顔を上げたとき、彼女の顔はきっぱりと覚悟と大志をあらわし、凜然としていたと私は思います。

その前から小唄、長唄、新内、浄瑠璃などの名取ではありましたが、西松流の名跡継承を許されたことは名前がひとつ増えたのとはわけが違います。一本立ちの足場を得、独自で展開できる足場を得たのであり、それが今日の飛躍へとつながったのだと思います。もし西松という足場を得なければ、活動を広げようにも、もったい各流派のしがらみを背負い、殻破りの苦勞をしなければならなかったのではないのでしょうか。

美紗の会旗揚げから六年後の89年、富本豊前こと石川澤月師の七回忌追善演奏会が行われ豊美紗さんも勿論出演されました。その秋西松文一師が他界されました。翌90年西松布泳披露の松風会を主催、さらに翌91年文一師三回忌追善演奏の松風会を開催。こうして年次を追ってみると、時こそ来たり、いよいよ飛躍の時がやってくるように見えます。まさにそのように、92年には六月に第十回ゆかたざらひ、七月に「たより第1号」発刊、そして十一月には北米演奏旅行に行かれたのです。そのときのアマースト大学における演奏で聴衆を魅了した自己演出の巧みさは「たより第5号」(平成5年3月)のソルトさんの文章に上手に書かれています。

以降最近までの美紗の会の発展と充実、国内外を問わぬ数々の公演についてはいちいちあげる必要もありません。ともかく天空高く美しく演奏する布味さんを見上げるばかりです。

布味さんはいいつも「皆様のおかげで」と仰います。それも事実でしょう。しかし、布味さん自身に周囲の誰もがサポートしたくなるような魅力があるのだと思います。それは芸の魅力だけではなく、誰をでも受け入れる広

い心を持ち、しかも謙虚さを失はない人柄の魅力なのです。

これからもどんどん高く、はるか天空に飛翔するこの素晴らしい師匠を皆で盛り立て、その芸を味わい楽しみたいと思います。

《岐阜たより》

布詠師匠岐阜で面目躍如

福村 善光

先般布詠師匠より7月号「美紗の会たより」をご送頂いた際に、残書お見舞いの短冊の文尾に「次号美紗の会たよりに、岐阜の様子を投稿する様」にとのご下命がございました。

岐阜の会は「粋艶会」と称しまして、去る八月三日にゆかた会が開かれましたので、筆者前期高齢者となって日ごとに忘却する故、慌ててそのことも含めて報告申し上げます。

そもそも岐阜の田舎侍がお江戸の文化を習得せんと、二十年程前に始まり葛西会長を戴いて二十余名の粋狂好みが集まりました。ところが長年ご指導戴いて参ったお師匠が二年程前よりご体調不全となり、組織は存続したまま、先輩

同士の三味線で従前にお稽古した唄を復習しておりました。そういっ



DVD『夢 十九夜物語』完成

第四回ニュアンスの会での「映像とのコラボレーション」を完全再現。
舞踏家・大野慶人とのコラボレーションをボーナストラックとして加えた全21曲、101分
販売価格 4,000円(税込・送料別途)
特製28ページ・ブックレット付



- 参加コラボレーター
阪名典人 和泉昇
ウィリアム・ジョンストン
江野勝治
大野慶人
の野原敦子
香月人美
金澤一志
河村権
クリス・ドレイク
佐藤真一
ジェシー・グラス
四差ゆづり
島本穂子
ジョン・ソルト
新城城文
高橋昭八郎
田口哲也
田村洋
テイラー・ミニョン
デビッド・ケネディ
ながたはるみ
中村恵一
藤宮保男
HOLON
モニカ・ケーク
ヤリタミサコ
米沢陽一
レイ・ウルフ
- 発売元
highmoonoon
http://www.highmoonoon.com

唄と三味線 西松布詠

た時にタイミング良く布詠師匠が岐阜の料理屋「たかだ」で独演会が開催されました。この情報を入手した我らの世話人の三味線を生業にしておられる原信行氏が、布詠師匠に我々のご指導をお願いすべく早速お電話戴いた処、京都でお会いされる約束が出来早速出向いて戴きました。

「多忙の布詠師匠故毎月の出稽古は出来かねるといついことば、一ヶ月に一度のご指導で一年余経過致しました。」

我り田舎侍(一部田舎に置いておくのが惜しい様な熟女あり)は、その後一層熱が入り、八月三日に「第一回ゆかた会」を開催致しました。美紗の会からも四名の賛助ご出演を戴き、また地元の聴衆二十余名の出席も戴き、三時より賑々しく発表会を行いました。硬直しておりました演者も、発表が済むと、とたんに軟化して懇親会では手配していた五名の田舎芸者のお座付き、お酌ではしゃみ廻り、同士であります会場の若手唄師「かわいさ」の

おやじは、床が抜けるのではと心配しておりました。

泥酔の輩は二次会に岐阜の飲楽街柳ヶ瀬へ繰り出し、さて……何時に帰宅したことやら。

「たより」第61号

発行者 美紗の会

編集責任者 大久保 朋子

■美紗の会

主宰 西松 布詠

稽古場 港区白金台三二二一

白金台プレイス三階

電話 (三四四一) 二七二六

(五四四七) 二四二二

http://www.17.ocn.ne.jp/~misa57